



高杉晋作尊攘の信念

下関市長府の功山寺境内には、具足を着け帯刀した、馬上の高杉晋作像があります。これは、元治元(1864)年12月15日夜、当時功山寺に潜居していた尊攘派公家・三条実美ら五卿の寢所を雪中に突然訪れ訣別を告げ、総勢80人程度の隊を率いて挙兵した晋作の姿を表したものです。向かったのは新地会所(下関市上新地町)。ここは同年7月の禁門の変後、朝敵となった長州藩の藩政を掌握した、幕府への絶対恭順を旨とする俗論派政府の馬関根拠地でした。

晋作は長州藩士高杉小忠太(名は春樹)の嫡子で、名は春風、字は暢夫。晋作は通称です。晩年には谷潜蔵と改名。天保10(1839)年に生まれ、19歳のころから松下村塾に学びます。文久2(1862)年、幕吏に同道して上海に渡航。そこで晋作が見たのは、外国の支配下に堕ちたかつての強国・清の現状と西洋式軍備の脅威でした。この経験は彼の(軍備充実の上での)攘夷の信念を固める重要な契機の一つとなります。

元治元年11月、晋作は筑前に潜行します。これは筑前勤皇党の一人、中村円太の画策によるもので、九州諸藩の尊攘派に連合の働きかけをねらった

ものでした。ところが目論見はずれ、しかも晋作の不在中に長州藩では、藩主が詰め腹切らされても武装を解いて幕府を容れる方針の俗論派が台頭、この情勢に晋作は悲憤して国元に引き返し、ついに功山寺での挙兵に至ります。「自分がもし馬関で死ぬことができたら、招魂場におまつりください。(中略)前文に申し上げた通り、赤間関の鬼となつて討ち死にする結末なので、(中略)自分は死んでも恐れ



ながら天満宮のごとくになり、赤間関の鎮主となる志です。」
 (『東行先生遺文』)

これは、晋作が帰国後、筑前行に同道した大庭伝七(志士たちを援けた豪商・白石正一郎の実弟)に宛てた手紙の一文です。「天満宮のごとく」とは菅原道真のことを指すのでしょうか。晋作は天神信仰に篤かつたともいわれ、陣所に常にあつたという「菅原大神」(清末藩主毛利元純揮毫)の守護旗が遺されています。攘夷に討幕に、隊を率いて連戦した晋作でしたが、慶応2(1866)年の秋口から病により戦陣を離れ、翌春4月、29歳でこの世を去ります。時代の行く末を見ずしての永逝は、さぞ無念だったに違いありません。

太宰府市公文書館 藤田 理子